

# 幕末・宿場町に 花開いた八丁目文化

期日：令和6年1月20日（土）

午後1時30分～

会場：松川学習センター

1、開 会

2、あいさつ

八丁目城跡周辺整備協議会会長 丹野義明

3、講 師

信達歴史文化研究会 星 隆 氏

4、講 演

幕末・宿場町に花開いた八丁目文化

5、閉 会

## <講師紹介>

星 隆 氏（北塩原村生、松川町在住）

北芝電機株式会社に勤務するかたわら、福島盆地を歩く会に所属し、県北地方の歴史文化財を研究された。古文書の解読を専門とし、福島市史編纂室の業務に関わり、永く福島市文化財保護指導委員を務めた。

文学碑の調査研究に熱心で、松川の文学碑をまとめている。

また、加藤候一の絵画・古文書の整理を行う等、八丁目文化について詳しい。

現在、福島盆地を歩く会や信達歴史文化研究会の創立会員として活躍されている。

## 幕末、宿場町に花開いた八丁目文化

信達歴史文化研究会 星 隆

## 「文化」「八丁目文化」という言葉

## 精選版日本国語大辞典「文化」

- 1 (1) 権力や刑罰を用いなくて導き教えること。文徳により教化すること。
  - (2) 世の中が開け進んで、生活内容が高まること。文明開化。
  - (3) 自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。
  - (4) (他の語の上に付いて) 便利である、ハイカラ・モダンである、新式であるの意を表す語。
- 2 江戸時代、光格・仁孝天皇の代の年号 (1804～18)

現在一般的に使われている「文化」という言葉は主として1(3)の意味。明治初年、西周<sup>にしあまね</sup> (1829～97、蘭学者・哲学者) が使ったとされるが、英語の *cultuer* の訳語として1885年、坪内逍遙 (1859～1935、小説家) が『小説神髓』で「文華」として使用、翌86年、後輩の大西祝<sup>はじめ</sup> (1864～1900、哲学者) が「文化」を使ったのが最初との説あり。

## 「八丁目文化」の提唱者

資料名	執筆者	出版年月	内容
八丁目物語	茂木 雨石	1952.8	「列伝」として八丁目文化にかかわる人物を紹介するも「八丁目文化」の文言なし。
続八丁目物語		1953.11	
福島市史3 (近世Ⅱ)	梅宮 茂	1973.3	第5編近世の文化と生活第2章文学第1節俳句に「八丁目連」の項目あり、ただし「八丁目文化」の文言なし。
松川のあゆみ	石川 博	1973.11	第3章近世に「八丁目文化」を立項し解説。
	高橋 恒男		近代以降の「松川の文化」を記述。
福島市史別巻v (福島町の町と村Ⅰ)	佐藤 友治	1982.3	松川村 近世の松川に「八丁目文化」を立項し解説。
八丁目宿	桜内 一宏	2001.11	町人文化の開花に「八丁目文化といわれるような町人的文芸が開花」と紹介。

上の表にあるように「八丁目文化」という言葉が初めて出てくるのは、松川小学校創立100周年記念誌『松川のあゆみ』である。筆者の石川博先生が提唱か。

## みちのくに過ぎたるもの

「みちのくに 過ぎたるものが三つある 石に唐木に鶺鴒の団七、

と、幕末のころ、江戸の文人・粋人の中で謳われたという。八丁目文化を端的に表し言葉である。

石は篆刻の名人といわれた菅野晋斎、唐木は三味線作りの名工だった三味線屋久米吉、そして鶺鴒の団七

は八丁目文化の中心人物である百舌鳥廻舎排。

元歌あり

「家康に 過ぎたるものが二つある 唐の頭に本多平八、

家康の敵、武田信玄の家臣小杉左近の落書ともいわれ、唐の頭はヒマラヤに棲むヤクの尻尾の毛で非常に高価で家康は兜の飾りとし、本多平八は徳川四天王のひとり、鎗の名人本多平八郎忠勝（1548～1610）。福島藩 15 万石初代藩主本多忠国は忠勝から 4 代目の子孫。

「〇〇〇〇に過ぎたるもの……」という言葉は各地にある。

## 八丁目文化の時代

文化・文政年間（1804～30）江戸を中心に栄えた町人文化を「化政文化」といい、近世後期町人文化の頂点だった。文化・文政と、それに続く天保年間（1830～44）は、八丁目文化も発展した時代だった。19 世紀前半の八丁目宿の年表を『松川のあゆみ』および『盛林寺誌』から拾う。

年号	西歴	摘	要
享和 1	1801	11. 伊能忠敬八丁目通過 <sup>㊦</sup> <sup>㊧</sup>	
文化 2	1805	幕領代官・大岡源右衛門に <sup>㊦</sup>	
4	1807	幕領代官・竹内平右衛門に <sup>㊦</sup>	
8	1811	鬮耳坊嵐字句碑建立（盛林寺） <sup>㊦</sup>	
9	1812	幕領代官・山本大膳に <sup>㊦</sup> 佐藤絶階詩碑建立（盛林寺） <sup>㊦</sup>	
11	1814	幕領代官・山口鉄五郎に <sup>㊦</sup>	
13	1816	八丁目・浅川新町・清水町の 3 宿、助郷困難につき訴訟 <sup>㊦</sup>	
文政 1	1818	このころ八丁目宿繁栄 <sup>㊦</sup> <sup>㊧</sup>	
4	1821	幕領代官・古山善吉に <sup>㊦</sup>	
5	1822	12. 川俣代官の暴政に対し二本松丹羽公に愁訴（駆込一揆）、代表者 19 人江戸送り <sup>㊦</sup>	
6	1823	4. 前年の一揆代表の柏屋庄右衛門獄死 <sup>㊦</sup> 6. 同扇屋徳之丞帰宅後死去 <sup>㊦</sup>	
7	1824	幕領代官・佐藤忠右衛門に <sup>㊦</sup>	
10	1827	幕領代官・池田仙九郎に <sup>㊦</sup>	
29	1829	加藤紫明 65 歳で没 <sup>㊦</sup>	
天保 2	1831	10. 八丁目大火、常念寺延焼 <sup>㊦</sup> <sup>㊧</sup>	
3	1832	斎藤春連誕生 <sup>㊦</sup>	
4	1833	2. 八丁目・天明根・鼓ヶ岡・上水原・下水原 5ヶ村二本松領に。八丁目組。八丁目代官所（代官：大宮権左衛門）設置 <sup>㊦</sup> <sup>㊧</sup>	
7	1836	天保の飢饉 <sup>㊦</sup> <sup>㊧</sup>	
11	1840	八丁目組人口 1929 人 <sup>㊦</sup>	
12	1841	斎藤松調歌碑建立（盛林寺） <sup>㊦</sup>	
14	1843	「信達一統志」（志田正徳）、「相生集」（大鐘義鳴）成立 梅二防松夫句碑建立（盛林寺） <sup>㊦</sup>	
嘉永 1	1848	八丁目宿大火 580 棟焼失、損害 7800 両 <sup>㊦</sup> <sup>㊧</sup>	
3	1850	5. 盛林寺より出火 常光院・諏訪神社焼失 <sup>㊦</sup>	

㊦：『松川のあゆみ』 ㊧：『盛林寺誌』

## 松川村の民業

明治 13 年に成立の『信達二郡村誌』「松川村」に記録された職業別戸数。幕末とそれほど変わらないのではないか。( ) 内名称は『信達二郡村誌』作成のため村から提出された原稿と思われる『村誌 第壹区信夫郡松川町』(斎藤正一氏蔵) に記された名称である。

農二服スル者(農) 165 戸	逆旅(旅籠屋) 37 戸	貸座敷 10 戸
菓匠(菓子店) 11 戸	魚商(魚請売店) 8 戸	(煮売茶屋 6 戸)
蕎麦麩匠(饅頭蕎麦店) 2 戸	醸匠(酒造店) 3 戸	麩匠(饅頭店) 6 戸
銭湯(湯屋) 1 戸	雇人周旋(雇人口入処) 3 戸	当商(質店) 6 戸
穀商(穀物店) 3 戸	灯油商(油店) 1 戸	粗菓商(荒物店) 4 戸
綵帛商(呉服店) 1 戸	貨郎(小間物屋) 2 戸	薬品商(薬種店) 1 戸
骨董商 3 戸(古道具店 1 戸・古鉄買店 2 戸)		生糸商 15 戸
染工(紺屋職) 2 戸	提灯匠(提灯張) 1 戸	襦袢商(表具師) 1 戸
綿匠(綿打職) 2 戸	傘工(傘張) 2 戸	裁縫匠(裁縫職) 1 戸
補鍋匠(鑄掛職) 3 戸	木工(大工職) 10 戸	箍工(桶工職) 6 戸
石工(石工職) 1 戸	鍛冶(鍛冶職) 2 戸	鋸商(木挽職) 2 戸
畳席商(畳工職) 3 戸	塗工(壁職) 1 戸	葺商(屋根葺職) 5 戸
猟師(猟職) 3 戸	水車(水車屋) 4 戸	馬商(牛馬営業) 4 戸

## 八丁目文化の人びと

<sup>かとうしめい</sup>  
加藤紫明(明和 2～文政 12 <1765～1829>)

八丁目文化の中心的人物。本名忠兵衛、式峰楼・華憚斎とも称した。桑折町北半田の菅野家から加藤家に入った。北半田御免町に住む子孫の菅野繁翁さんによれば、先祖は加賀藩江戸家老で「うたよみ」と伝えられてきたという。白石千手院住職だった松窓乙二(1756～1823)の門下。八丁目連の中心として多くの門人を育てた。西光寺本堂前に辞世の句碑が立つ。子孫：宿地町・加藤雄平氏。

波池周婆廻 閑憐破通流遠渡 奇衝誉何難 式峰楼紫明  
(蓮葉の 枯果つる音 閑夜かな)

本碑 天保 3 年(1832) 建立 碑高：74cm

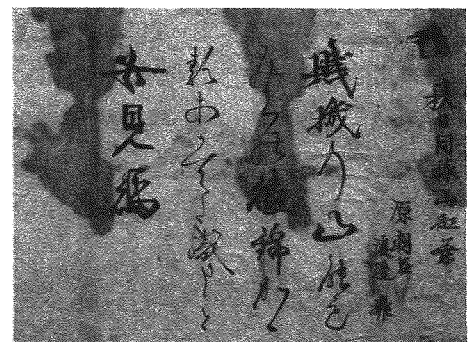
副碑 昭和 47 年(1972) 建立 碑高：103cm



紫明句碑 左：本碑 右：副碑 西光寺本堂前

<sup>もすのやはい</sup>  
百舌鳥廻舎排(寛政 7～文久 2 <1795～1863>)

加藤紫明とともに八丁目文化の中心的人物。中町塩屋に生まれ本名渡辺団七。大田南畝(1749～1823、蜀山人、四方赤良ともいった。狂歌師)とも交流があった。多才で書画・茶道・華道・囲碁・将棋等に精通。加藤候一と伊勢詣りをして道中話題・奇行も多く評判になったという。2 代目十返舎一九『奥羽一覽道中膝栗毛』第 4 編にユーモラスな序文を書いた。残念だが句碑はない。「きまり喜平は水戸屋のぢさま、だまり団七塩屋のぢさま」という戯れ歌にうたわれたという。右は渡辺排の書。旧宅は中町の高電駐車場。屋敷



排書：加藤貞雄氏蔵

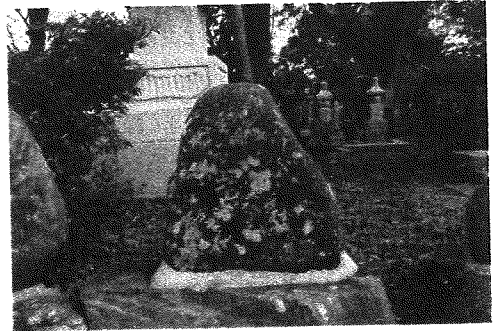
神の祠が残っている。

賤機の 山のもみぢの 綾錦 かゝるあがて (わが手) に 織りしとも見へ  
辞世 まかり出て はかげに見ゆる おそざくら

こくしんさいおうぶつ  
谷神齋鷺仏 (生没年不詳)

加藤紫明の子で門弟でもあった。『五村雑誌』の著作があり、ともに天保 12 年 (1841) に成立した『信達一統志』および『相生集』には『五村雑誌』を参考資料とし引用したことが記されている。西光寺に父紫明の句碑に並んで鷺仏の句碑が立つ。

秋風の 吹口とけて 無分別 谷神齋鷺仏

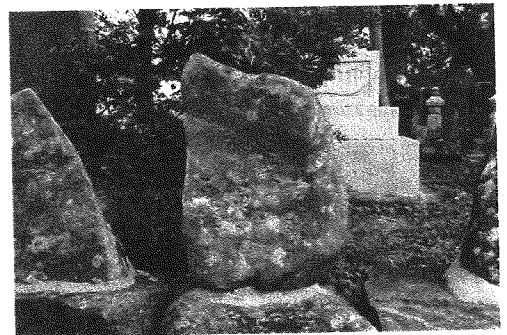


鷺仏句碑 碑高：67cm 西光寺本堂前

かんの かくせん  
菅野鶴僊 (文化 9 ~ 明治 10 <1809 ~ 1877)

天明根に生まれる。通称、次郎右衛門。次郎吉・伝治・伝七ともいった。篆刻で晋齋、俳句で永楽庵、晩年は西光寺前で水車屋を営み水車庵を名乗る。"みちのくに過ぎたるもの……"の一人「石」。篆刻で著明。二本松藩家老丹羽守の雅印を作って有名になる。田島久敬 (号：鷗僊、儒学者、初代八丁目小学校校長 1835~1914) に漢学を学ぶ。百舌鳥酒舎排の門人。明治 9 年 (1876) 八丁目・天明根・鼓ヶ岡合併のおり「松川村」を提唱した。現・天明根集会所が屋敷跡。

辞世 名月も ふけて明るし 西障子 水車庵鶴仙



鶴僊句碑 碑高：75cm 西光寺本堂前

かちめ の やとうへい  
鷗 迺屋東平 (明治 25 年 <1892> 没)

尾形治平。諏訪神社拜殿に明治前期に奉納された歌額あり、尾形東平の名で「今朝解けし 雪気の水に 濁り江の 影朧なる はるの夜のくも」という歌が肖像とともに掲げられている。なお宿屋飯盛 (石川雅望ともいい江戸時代後期の狂歌師・国学者、1753 ~ 1830) の『狂歌選集』に「八丁目鷗の屋」の名前があるが、時代的に無理がありそうで、父親か。西光寺本堂裏の一族の墓碑あり、左側に和歌が刻まれている。

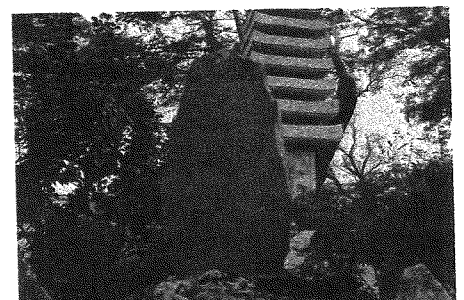
千代までの みせきかけても 老行は とまらさりけり  
松川の水



東平墓碑 碑高：75cm 西光寺本堂裏

とうりんあんせつこう  
桃林庵雪好 (文政 8 年 ~ 明治 33 年 <1725 ~ 1900>)

本名：菅野金作。金朔とも。向町大竹吉佐衛門 3 男。中町中田屋を継ぐ。俳句結社「錦風社」を興し門人を指導。玉幽斎輝信の名で書画をよくし、明治 15 年 (1882) 東京絵画共進会に「鷹図」出品、入選。時の福島県令三島通庸から賞状を受けたという。初代松川郵便局長。西光寺に「筆硯自警」篆額のある頌徳碑があり、背面に八丁目小学校初代校長の田島久敬の撰文を西光寺住職の平林育京が書いた。なお「俳道門人」として 16 人の名前と句が刻まれている。句の詠み方には疑問符がつくが、



雪好頌徳碑 建碑：明治 25 年 (1892)  
碑高：115cm 西光寺寺前

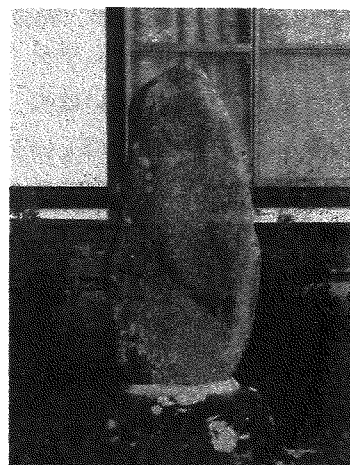
蓮咲や ほんのりと夜は 明かり

<sup>とうばいしやししょうちょう</sup>  
灯燧舎 松 調 (寛政 5 ~ 天保 5 (1793 ~ 1834))

本名：斎藤金助、屋号：蠟燭屋。「松調」の号について諸説あり、『八丁目物語』=松調、故・阿部佐氏=松個、『福島県俳人辞典』=松調、『福島のいしづみ』=松調。句碑のくずし文字はどとでもとれるが、松風の音とすればここは「松調」としたい。本町の金水晶酒造店と同じ屋号、蠟燭屋を名乗り同じ一族で、灯燧舎は屋号からであろう。「八丁目家主一覽」の中町稻荷神社入口北側 2 軒めに「蠟燭屋金助」の名賀見える。松川に子孫なし。盛林寺に句碑あり。

世の中は なかし短し 草の花

松調句碑 建碑：天保12年  
碑高：82cm 盛林寺本堂左



<sup>さとうぜっかい</sup>  
佐藤絶階 (文化 9 年 (1812) 没)

本名：佐藤治郎兵衛、屋号：川俣屋。代々鼓ヶ岡村の検断役。八丁目文化に中では珍しい漢学者。聾耳坊嵐字の友人。中町旧大谷医院の場所に住んでいた。天明 3 年 (1783) に高遠石工によって建てられた諏訪神社石鳥居に名前が見える。盛林寺に漢詩と辞世の句を刻んだ碑が建つ。

望岳主人勝子礼没矣 枕頭有一詩採而以彫焉 雪苦霜辛知幾年  
老翁八十鬢皤然 歳寒将問生涯淡 笑指風前一縷煙  
辞世 炭かまの けふりは老の 行衛かな 絶階居士



絶階詩句碑 建碑：文化9年 碑高70cm  
盛林寺本堂左

<sup>ろうじぼうらんじ</sup>  
聾耳坊嵐字 (元文 5 年? ~ 文化 8 年 (1740? ~ 1811))

本名：茂木与兵衛、通称：角屋与兵衛。中町松月堂駐車場のところに住んだ。京都の遅月庵空阿 (1750 ~ 1812) と親交あり、京文化を八丁目に伝えた。加藤紫明・佐藤絶階・梅二坊松夫・桃林庵雪好らとともに八丁目連の主要メンバー。上鳥渡日吉神社参道にも「つちくれに 蝶居りけり 秋の風」の句碑がある。盛林寺に辞世の句碑が建つ。

辞世 咲てある 朝兎をみて わかれけり

朝兎は朝顔のこと。『八丁目物語』『続八丁目物語』

の著者で、松川町長を務めた茂木雨石 (松次) は嵐字の子孫。茂木家は千葉県に移ったという。

嵐字句碑 建碑：文化8年  
碑高102cm 盛林寺本堂左



<sup>うめにぼうまつお</sup>  
梅二坊松夫 (文化 14 年 (1817) 没)

別名を生田門甲ともいった。聾耳坊嵐字宅に寄寓。宗匠。和歌を詠み、絵も描いたという。八丁目文化を担ったひとり。『八丁目物語』には「茂木家に位牌及旧墓地に石碑あり」とあるが、盛林寺の茂木家墓地には松夫の墓碑は見当たらない。旧墓地は別の場所か。盛林寺に辞世の歌碑あり。

辞世 有明の ひろき中行く からす哉 梅二坊松夫

松夫歌碑 建碑：天保14年 碑高：67cm  
盛林寺本堂左



つづみがおかたてしうきよ

### 鼓岡館笑居（生没年不詳）

本陣桜内家の先祖というが、故・桜内一宏氏は何代前の先祖かわからないという。小田・陽林寺に天保13年（1842）に奉納された歌額「法楽百歌」に「八丁メ 鼓岡館 桜内笑居」の名で「世をうしと 分入る山に 物いはぬ 雲ぞうれしき 我友にこそ」の歌が肖像画とともに掲げられている。写真の句碑は松川小学校が旧所在地から現在地に移転するまで、松川のシンボルツリーとされていた「二本杉」があり、その周辺にあったが、平成2年（1990）小学校が移転するさいに、墓碑とともに松陵中学校体育館北側の本陣桜内家の旧墓地に移された。



笑居句碑：松陵中学校体育館北側  
碑高73cm

己がみし 秋と知らでや とふ胡蝶 鼓岡館笑居

八丁目文化の人には、ほかに絵をよくした加藤候一（銀五郎 寛政年～文久3年〈1790～1863〉）、「みちのくに過ぎたるもの……」の三味線屋久米吉（文化4年～明治22年〈1807～89〉）、常磐津の菅野八佐太夫（本名：滝蔵。滝太夫とも。明治11年〈1878〉没）らがいる。

時代はさかのぼるが安永年間（1772～81）には、八丁目宿の遊女の歌もみられ、また7歳の少女の歌が句集に紹介されているという。さらに字大坂坊の旧4号線西側にある川崎屋野地家の旧墓地には、弘化4年（1847）に11歳で亡くなった勘助一月松と号した一の墓碑があるが、辞世の「ちることを きつういそくや 遅さくら」という歌が刻まれている。

### 小田・陽林寺奉納俳諧歌額にみる八丁目の歌人

小田の位作山陽林寺は伊達家ゆかりの古刹。ここに天保13年（1843）に奉納された『俳諧歌法楽百歌』（肖像画付50人2面、同12人1面）、安政2年（1855）の『俳諧歌合』、慶応元年（1865）の『法楽』という俳諧歌額が掲げられている。

八丁目の歌人も歌を寄せている。

#### 『俳諧歌法楽百歌』

八丁メ 十朋堂亀人

我やどの 紅葉を風の  
吹く度に なく音色ある  
峯の小雄鹿

八丁メ 千笑亭雪光

よひの間の 不二の夢から  
おもしろく 横雲つづく  
春の曙

八丁メ 桜 奈賀女

花のとき 誰移るかも 仮庵は とまもすのこも 懸造也

八丁メ 一元亭菊好

手入する 菊こそ花は 一ツなりと 露はちとせの かずにおきてや

八丁メ 湖月亭水頼

神垣の 草ふり分て 鈴虫の なく音さびしき 秋の夕暮

八丁メ 優唸社 排

露ちらす 日影をおほふ 白雲を 命と頼む 朝がほの花

八丁メ 一真亭弘好

人ならば ゑぼうしきせて 太刀はけて 君とまをさん 花桜花

八丁目 談講内翁輔

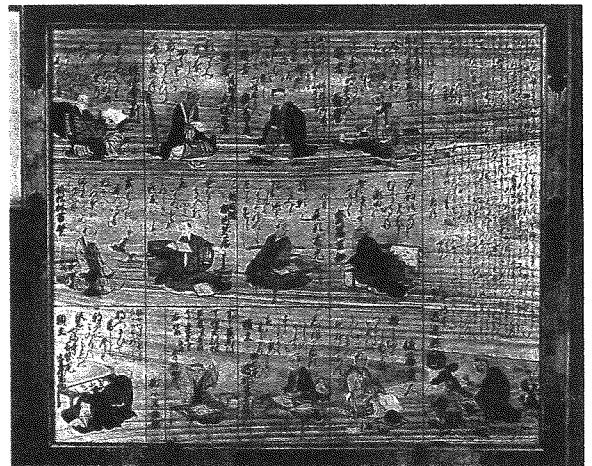
砂やあると 海苔をかざせば 紫の 霞み見えすく 品川の澳

八丁メ 一間亭数知

風にちる 草葉の露を 見るにさへ 浮世も斯と おもはるるかな

八丁目 鼓岡館 桜内 笑居

世をうしと 分入る山に 物いはぬ 雲ぞうれしき 我友にこそ



俳諧歌法楽百歌額 2段目左から2人目：桜内笑居、同左端：梅松庵苔繁（小田・陽林寺蔵）

八丁メ 梅松林苔繁 妻よぶる 鹿の鳴く音も 数そへて 紅葉の色の まさる夕栄

『俳諧歌合』 “山寺鐘”

八丁目 百舌鳥屋排 明暮に 麓の里に 通へども 世ににぬ音や 山寺のかね  
八丁目 浅舞庵折鶴 いましめの かたき酒さへ 夕暮は 破らせぬべき 山寺のかね  
八丁目 石上風流里 暁も ゆふべも花に いとはるゝ 鐘の声には 色香だになし  
同 清芳園胤算 鬨伽を汲 真柴苜つゝ 山寺に 帰る葉や ゆふ暮の鐘  
同 嶽滝亭茂高 ねよとつく 鐘もありけり おもしろく みはてぬ夢を やぶるもの音  
同 斎藤 三積 更わたる 霜夜にさゆる 鐘の音も 氷るとばかり きくが寒けさ

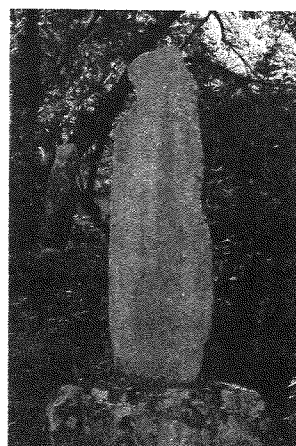
八丁目文化を継いだ人びと

さいとうはるつら  
斎藤春連 (天保2年～明治20年 (1831～87))

本名：健輔、屋号：蠟燭屋。いまの金水晶酒店に生まれ、百舌鳥廼排の門下。  
ささのや  
笹廼舎とも号した。歌人・書家。明治元年(1868)梅花千首を北野天神に奉納して有名になった。明治14年(1881)の明治天皇東北御巡幸の際、平林宥京(西光寺住職)、西東広栄(諏訪神社祠官)とともに和歌を献上した。盛林寺参道左手に春連死後、碑陰に「斎藤健輔号笹廼舎春連臨終詠書 明治廿年二月六日没享年五十六矣 同年五月学友平林宥京建之」と記した辞世の歌碑が建つ。

露の身は猶もはかなくなりけり  
いまをかきりにきえんとおもへば 春連

斎藤春連辞世歌碑：建碑：明治20年 碑高：137cm 盛林寺参道



たご  
田毎

本名：、細田栄孝。昭和5年～11年(1930～36)までの6年間、異例の長期間国鉄松川駅の駅長を務めた。駅員の教養を高めるため俳句を指導、句誌『松風』を発行、松川の俳人大谷谷泉・高橋紫光らと交流。宇天王原の八坂神社境内に句碑あり。碑陰に「詠恩田毎先生」とあり36名の名前を刻む。うち33名が俳号。小林清・阿部伊勢松ら地元有力者の名前もあり、広く交流した駅長。ただし経歴等はJR松川駅・福島支店でも旧国鉄時代の資料は廃棄されて不明。

ひくらしや 今しすまん 社頭の日

田毎句碑：建碑：昭和9年 碑高：157cm 八坂神社境内

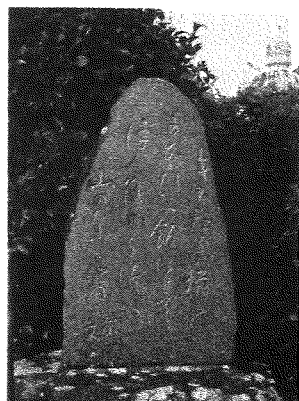


うえきほうぶん  
植木芳文 (明治39年～昭和6年 (1903～1931))

本名：植木文右衛門、屋号：大森屋。かつての検断職だった植木九郎右衛門の長男。父も高栄と号した歌人。信夫郡立信夫農学校から県立蚕業学校(現・福島明成高校)に学ぶ。若くして病を患い福島公立病院内科に入院、妻子を残して26歳で没した。死後学友によって遺稿集『赭土』が出版された。晩年の歌には澄み切った歌が多い。死後7年目に松川の大谷谷泉・高橋紫光

・服部童村ら泉短歌会の発議で盛林寺本堂前に歌碑が建てられ、記念誌『檜廼葉』が刊行された。

芳文歌碑：建碑：昭和13年 碑高：95cm 盛林寺本堂前





きりたての檜の にほひか飯にまで  
ほんのりうつる 山のなら箸 芳文

おおや こくせん  
大谷谷泉

本名：大谷誠。中町平林家に生まれ、大谷元良の養子に入る。千葉医専（千葉医大→千葉大学医学部）に学ぶ。同大学で講師。昭和6年（1931）松川に戻り大谷医院を継ぐ。内科・小児科医、医学博士。大学時代から谷泉と号して短歌・俳句を作る。随筆・絵画・書をよくした。とくにのびやかな書はすばらしい。初代松川町教育委員長。高橋紫光・水原の服部童村とともに昭和の松川「八丁目文化」の中心人物。昭和48年（1978）松川小学校創立100年祭の実行委員長を務めた。翌年、校庭南側に「百年祭 終へし校舎に あしたより少年の日のことく 雪ふる 谷泉」という歌碑が建てられた。昭和13～14年（1938～39）に斎藤茂吉らが審査員となって『新万葉集』11巻が改造社から出版され、谷泉の下記の歌が採録された。その歌碑が中町大谷栄子さん宅（旧大谷医院）の裏庭に建つ。

雪白き吾妻のねろ（嶺ろ）に影をおとし  
雲の過ぎゆくはさひしかりけり 谷泉

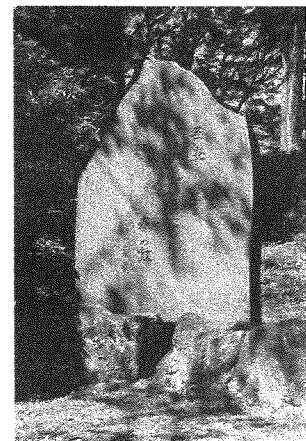


谷泉歌碑：建碑：昭和54年 碑高：55cm 中町・大谷栄子さん宅地内

たかはし しこう  
高橋紫光（明治40～平成5〈1907～93〉）

本名：高橋丑三。福島商業銀行に勤めたが、昭和2年（1927）の金融恐慌で同銀行が破産後、オリエンタル写真学校に学ぶ。のち中町にタカハシ写真館を開く。公民館長、町会議員など歴任。水原秋桜子の「馬酔木」に参加、同門の「鯨」同人。松川俳句会会長。土合館公園に句碑が建つ。

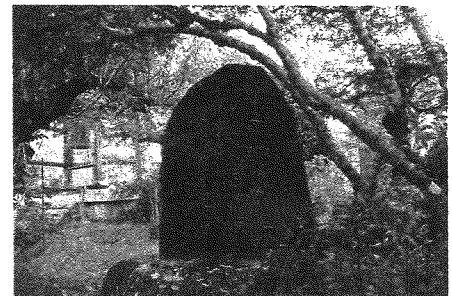
吾妻より 安達太良へ架け 春の虹



紫光句碑：建碑：平成2年 碑高：165cm 土合館公園

いしかわひろし  
石川博（大正3年～平成5年〈1914～1993〉）

立子山疣石峠の麓、沢尻に生まれた。昭和7年（1932）福島中学（現・福島高校）卒、翌8年（1933）から昭和49年（1974）に安達町下川崎小学校校長で退職するまで41年間教員生活を送る。昭和16年（1941）から満洲（中国東北部）の白梅在満国民学校勤務。21年（1946）帰国。帰国後、各地の小学校に勤めながら短歌会の基礎作り、育成に力を入れた。下川崎で長い教員生活を終え、その離任式の日を「訓示めく話はやめて 一人一人の児の眼差しをじっと見つめき」と詠んだ。歌集『冬の粒子』の冒頭の歌の碑が、盛林寺本堂前に建つ。なお歌の「旧任地」は伊達市梁川町霊山の白石小学校だという。



石川博歌碑：建碑：昭和63年 碑高：112cm 盛林寺本堂前

この峠越ゆれば 吾の旧任地 児等の 多くは往きて還らず 石川博